

第 115 回例会  
報告

ポーランド名作映画ビデオ鑑賞

## 『水の中のナイフ』 5/8



本例会は参加者 26 名（うち会員 11 名）と盛況だった。反省点として、パワーポイントの不調などで上映後の進行に課題を残した。アンケートでは「大変良かった」（5 点）5 名、「良かった」（4 点）4 名、平均 4.6 点とかなりの高評価だった。今後の上映希望作品としては（最近 3 回分の集計で）『デカローグ』『世代』『トリコロール 青の愛』『私は決して泣かない』『戦場のピアニスト』などが挙げられた。（池田光良）

ロマン・ポランスキの最初の長編映画『水の中のナイフ』（1962）はカヴァレロヴィチ監督の『尼僧ヨアンナ』のちょうど一年後に公開され、その「コスモポリタンの」で非政治的な性格が政府指導部と映画関係当局の忌諱に触れた。ポーランド統一労働者党第一書記ヴワディスワフ・ゴムウカは1963年8月の中央委員会総会で公式にこの映画を批判した。

『夜行列車』におけるカヴァレロヴィチ同様、ポランスキもまたスリラー映画の要素を取り入れ、政治的/社会的な問題設定は避け、共産政権が芸術作品から期待するお決まりの要素は無視している。この映画の西側での成功（ポーランド映画として初めてアカデミー賞にノミネートなど）は、ポーランド国内では不信の念をもって受け止められ、作者に対する反感を強めただけだった。ポーランドの評論家の多くはポランスキの人柄や伝説的な私生活を念頭に、色眼鏡を通してこの映画を見た。西側でも彼の以後の作品の評論ではその見方が踏襲されている。

ポランスキは、初期には有名な『ダンスと二人の男』（1958）など超現実的でグロテスクな映画を手がけたが、『水の中のナイフ』では「厳格なまでに知的で周到に構成された、形式主義的といってもいい」映画をつくらうとした。自伝『ロマン』での回想によれば、それは純粹のスリラー映画として作り始められた——二人の男女が小さなヨットに一人の男を乗せ、その男が謎めいた状況下で姿を消すのだ。

物語は狭い空間内で敵対する人物間の相克を描いている。本作はルネ・クレマン監督の『太陽がいっぱい』（1960）に似ている。二人の男と一人の女、階級差、鬱屈した身上、ヨットの上、ニーノ・ロータの哀愁を帯びたテーマ音楽などの共通点があり、ポランスキはクシシュトフ・コメダ（1931-69）のモダン・ジャズを用いて新しい感覚をもたらしている。

参考文献：ポーランド映画史、マルク・ハルトフ著、西野常夫、渡辺克義訳、凱風社、2006  
（坂尻昌平、映画研究者、札幌大谷大学非常勤講師）

## アンケートにおけるコメントより（抜粋）

- ✓ ポランスキの映画は、何本も観ていますが、『水の中のナイフ』は観る機会がありませんでした。ヌーヴェル・ヴァーグをポーランドで先取りしたような、なかなか興味を覚える感覚を味わいました。当時の東欧で、こんな素晴らしい映画を創っていたとは驚きでした。『青春残酷物語』『太陽がいっぱい』と重なり、観ていました。（80歳代）
- ✓ 45年くらい前、学生時代に観た映画ですが、今観るとまた学生時代とは違った感想になりました。閉塞されたヨットは正にその当時のソ連型共産国ポーランドそのもので、特権階級の夫婦と民衆である青年。青年の持つナイフは権力に対する武器であり、民衆が武器を取るのを嫌った権力側である夫はナイフを水の中に落す。更に青年も水に落すが、武器のない青年（民衆）は自力でヨット（ポーランド）に戻る。民衆を圧迫した権力は警察へ行く（正義への道）かどうか迷っている。そんな風に観えました。もう一回じっくり観てみたい映画です。（60歳代）
- ✓ 何十年振りくらいで再見。何度も見たけれど、やはりあざやか。ただ私はポランスキの熱心な見者ではないから、そう多くは見えていない。ハリウッドでの作はともかく、若い頃の作（60年代の作（…）未見）をやってもらえると有難い。20代の頃見た時はヨット用語もまだ知らず、シート（ロープ）の扱い方も知らなかったの、当然ヨットの動きも得心出来ずに見ていたけれど、ヨットの扱いがわかる現在はより我が事に思えて見た。男性の感想、当時のポーランド社会の寓意というのは、深く読んだものだと感じ。クシシュトフ・コメダの名はよく見るが、まとめて聴いたことがない。そんな機会があればいいのに。モニューシュコやショパンだけじゃないと改めて思う。（70歳代）
- ✓ ヨットで男女3人といえば『太陽がいっぱい』やそのリメイク『リプリー』を思い出したが、湖の上という密室の様な状況での3人の会話、行動等に緊張が切れる事なく楽しめた。ただ、若者役の人があまり若くは見えなかったのが残念。（60歳代）
- ✓ 音楽のジャズが当時としては現代的だと感じました。青年と夫が性格もすべて違って、頭でっかちの夫と生き抜く力のある青年が対称的。若妻が青年にひかれる気持ちがわかります。（70歳代）